

● 九州

西田 紘子

2022年12月現在、新型コロナウイルスは第8波のピークに達しそうだと報道されている。アウトブレイクからもうすぐ3年が経つ。2021年に比べれば、様々な条件を満たさなければならないとはいえ、海外渡航もしだいに活発になり、海外の音楽家や音楽団体の演奏を体験できる機会も増えてきた。感染症対策はさらに緩和され、公演会場での行動様式もすっかり板についた。

演奏会の形態については、配信と対面のハイブリッド型を続ける団体もあれば、対面に限る団体もあり、多様化している。合唱作品の演奏機会が増えたのは喜ばしい。しかし、客の戻りが芳しくないクラシック音楽公演も少なくない。

Withコロナ時代の支援に目を向けると、前年度に引き続き、文化庁令和3年度補正予算事業として「ARTS for the future 2」（コロナ禍からの文化芸術活動の再興支援事業）が展開された。自治体レベルでは、たとえば福岡市では、やはり継続事業としてアーティストに福岡市内の施設を開放する「FUKUOKA STAGE—文化・エンターテインメント施設開放事業」や、イベント開催経費の一部を支援する「文化・エンターテインメントイベント開催支援事業」が音楽活動の機動力となった。

今年はさらなる変事が起きた。2月にロシアがウクライナに侵攻。音楽家も、政治家や政治思想との関係が取りざたされ、ときに生命に関わる事態になっている。SNS時代において、遠い地の音楽家に降りかかる出来事や、音楽家たちの行動が、目や耳に入ってくる日々。日本でも音楽家や企画者が「いま、どの国のどのような作品を演奏すべきか」について検討を迫られた。九州の音楽家にとっても、遠い国の出来事ではすまぬ切実な問題である（後述）。

ごく一部ではあるが、福岡を中心に今年のクラシック音楽公演の動向を振り返る。

九州交響楽団（以下「九響」）は、拠点にしていたアクロス福岡・福岡シンフォニーホールの14か月間にわたる改修工事が終わったことから、10月からこの会場に戻った。その第一弾が、小泉和裕音楽監督が率いる第407回定期演奏会でのマラー「交響曲第2番《復活》」である。もともと2020年9月に2日間公演として予定されていたが、コロナ禍で変更を余儀なくされた曲目である。復活という語には、コロナ禍からの復活、ホールの復活、合唱を伴う大規模作品の演奏機会の復活など、複数の意味がこめられている。コロナ禍の副産物として有料のライブ&アーカイブ配信も加わり、2年越しの2日間公演として国外にも届けられることとなった。来年、九響は創立70周年を迎える。その節目を経て、小泉音楽監督は2024年度から終身名誉音楽監督となる予定だ。

海外の指揮者も戻ってきた。クリスティアン・アルミンク指揮のツェムリンスキー「人魚姫」は、九響から起伏に富んだ演奏を引き出した。アンドレア・バッティストーニの指揮によるヴェリズモ・オペラ・シリーズ第3弾として位置づけられていたプッチーニ「道化師」は、指揮者の来日がかなわず、公演1

週間前にガエタノ・デスピノーザ指揮に変更されて上演されたが、着々とレパートリーを拡げつつある楽団が頼もしい。2024年末をもって引退を宣言している井上道義のショスタコーヴィチ・プログラムは、指揮者のコロナ陽性により9か月後に延期されたが、中止に至らずにファンを安堵させた。

2月の第401回定期では、ロシアのヴァレリー・ポリャンスキーが、入国制限の影響により来日できなかった。代わりに20代の太田弦が、タネーエフとチャイコフスキーの師弟による交響曲を指揮した。期待を上回る化学反応を楽団に引き起こした太田は、2024年から首席指揮者に就任する運びとなった。2023年1月には福岡ジュニアオーケストラとの共演も予定されており、今後、福岡になくはならぬ音楽家になることが期待される。

団員に関しても、直前での奏者変更も起きた。運営側は、中止や延期以外の方法をとるべく、引き続きコロナ禍に翻弄される一年となった。さらに、今年3月には、半年後に演奏予定だったチャイコフスキー「序曲《1812年》」が、ウクライナの状況に鑑み、指揮者・現田茂夫との協議によって「イタリア奇想曲」へと変更された。また、以前はウクライナ出身のクラリネット首席奏者が在籍していたこともあり、楽団は有志による救援金を日本赤十字社に寄付している。ウクライナと日本の音楽仲間がリモート合奏を発信する交流もみられた。

懸念されるのは、福岡シンフォニーホールに戻ってから客席が予想より埋まらないことだ。だが、明るい展望もある。RKB毎日放送との連携による「RKBみらいシート」制度により招待された青少年たちの姿が、会場を若返らせている。5月には「九響マタニティコンサート2022～ママとパパとベビーに贈る0歳からのオーケストラ」が午前・午後の2回開催でいずれも満席となった。9月には楽団のLINEアカウントも開設された。多様なニーズ対応や客層の流動化に向けた取り組みが、今年はとくに目立った。

地域の合奏団も精力的だ。2018年に創立20周年を迎え、近年の定期演奏会の録音を集めたCDも発売した響ホール室内合奏団。北九州を拠点とする合奏団であるが、9月には、2008年の10周年以来となる東京公演「平和への祈り～20世紀最大の音楽支援者パウル・ザッハーの軌跡」（指揮・松村秀明）を実現させ、オンライン配信にも積極的である。2月末の第39回定期演奏会では同じ指揮者のもとショスタコーヴィチ（バルシャイ編）の「室内交響曲（弦楽四重奏曲第8番）」が演奏された。ウクライナ軍事侵攻の3日後とあって、切実な聴取体験となった。

シーハットおむらに拠点を置く長崎OMURA室内合奏団（2004年正式発足）は、より地域に密着すべく、今年は佐世保定期演奏会を始動させ、アルカスSASEBOで指揮者なしの緻密な演奏を聴かせた。アーティストック・アドヴァイザーの松村勝也による編曲作品とともに、近現代ものに力をいっそう注いでおり、年ごとに充実を増している。アーカイブ配信で今後、評判の範囲を広げていこう。

九州管楽合奏団（2004年発足）は、今年は福岡だけでなく、下関や鹿児島で公演を行い、首席客演指揮者ヨハン・デ・メイの日本初演作や編曲作品などで独自性あるプログラムを実現した。5月に宗像ユリックスで開催された演奏会では、世界遺産登録5周年を記念した正門研一への委嘱作品も初演し、地域拠点との連携を強めた。

ほかにも、現代音楽から古楽まで独自性ある公演が続いた。来年も、ローカルティとメディアの両輪によるアクセシビリティ向上の試みが存在感を放つと予想される。